

# 第20回 日本エイズ学会速報

通算第 3 号

発行：2006年12月2日（土曜）午後4時

編集：第20回日本エイズ学会学術集会 広報部

Living Together  
ネットワークを広げ真の連携を創ろう

## 臨床医学分野から 拠点病院と一般病院 急がれる連携構築 定例プレスブリーフィング・第3日



ブリーフィングする岩本理事長

定例ブリーフィングの最終日は、正午から、岩本愛吉・東京大学医科学研究所教授（日本エイズ学会理事長）が臨床の分野について行なった。

### ●拠点病院と一般病院の連携を確保

岩本理事長は、エイズ臨床の現状について、「治療薬が1日1回投与となり、薬の錠数も減るなどシンプルになってアメリカに追いついてきた。その反面、長期服薬のためにコレステロールや中性脂肪など生活習慣病のコントロールが課題となっている。治療をしながら社会的にも仕事などを継続するため、長期的な治療を考えるセッションが多く開かれている」と紹介した。

また、懸念事項として、耐性ウイルスの検査に健康保険の適用が認められたが、その結果、逆に検査会社に委託された検体の情報は個人情報保護なので得られなくなり、日本全体での耐性ウイルスの動向把握が困難になることが予想されると述べた。おなじく医療政策の変更にもなる懸念として、中枢神経系に悪性リンパ腫やトキソプラズマ症などを起こしてしまうと機能の完全回復が望めず、入院で長期療養を余儀なくされるが、国の医療政策で長期の入院が抑制されている問題をあげた。

陽性者の増加にともない、拠点病院と一般病院や診療所との連携が大きな課題になっているが、これについて岩本理事長はつぎのように話した。

「病院へ来たときにはすでにエイズ発症をしている、いわゆる“いきなりエイズ”の増加がとどまらない。拠点病院ではそれなりに日和見感染症への経験があるが、一般病院や救急病院で適確な判断をして拠点病院へつなぐための一般医師向けのセッションももった」

さらに、「性感染症を診察した場合、その背後に予想されるHIV

感染へも認識を深め、一般のSTDクリニックとHIV診療とを連携する必要がある。歯科医師とのセッションももたれたが、口腔についてはエイズ合併症の口腔カンジタなどの問題だけではなく、これからは一般のかたとおなじく虫歯治療などについて歯科医との連携が必要だ」と述べた。

最後に、一部病院への患者の集中について、今後一般のクリニックなどにどのように連携していくのか、また次世代の医師や看護師をどう確保していくのかなどの課題を指摘してブリーフィングを終えた。

### ●基礎、臨床、社会、幅広い人材による構成を堅持

質疑応答では、一般クリニックとの連携について質問があった。岩本理事長は、「東京診療ネットワークなどで、医師会と連携している話を聞いている。旧更生医療では、かかれる病院が1つにかぎられていたが、自立支援法ではその縛りが外れた。そのためいろいろな病院にかかりやすくなった一方、薬剤をどこで出すのかなどの新たな課題も出ている」と述べた。

理事長として総括的な意見を求められ、岩本理事長はつぎのように述べた。

「エイズ学会は基礎医学の研究者が中心で始まったと思うが、陽性者の増加にともない臨床が大きくなり、いま、池上会長をはじめNGOなど社会系の人びとも増え、国際学会と同様になってきた。日本の学会も幅広い人による構成を堅持しながら、同時に地道な議論の場を確保して空中分解しないことが大切だ」

## 「エイズと25年」をテーマに 池上会長講演

池上千寿子会長は1日午後の日本エイズ学会総会終了後、「エイズと25年——私の考察」と題して記念講演を行った。

この中で池上会長は1980年代前半に米国でHIV/エイズの流行に遭遇した体験などを踏まえ、流行の初期には、(1)死に至る病として登場した、(2)社会の少数派から始まった、(3)セックスが絡んだ—というスティグマ（社会的烙印）の三位一体が、この病気と向き合うことを避ける「政治的否定」「ケアよりも排除」「モラルと妥協した予防情報」などをもたらしたことを指摘した。

そのうえで25年間のHIV/エイズとの闘いがもたらした成果として、自助、互助、公助という有効な対策のための三位一体が大切だとして「それらがバラバラのままではギャップが広がっていくばかりであり、いまこそ自助、互助、公助を有効につなげるLiving Togetherの視点が必要である」と述べた。また、エイズ対策の現場ではそれが予防とケアの両立につながることを強調した。



池上千寿子会長

## 耳寄り情報 その1

# Living Together コンサートへ ようこそ！

3日間のプログラムの最後を飾り、「Living Together Concert」が2日午後6時から一ツ橋記念講堂で開かれる。「音楽とHIV陽性者の言葉を使ったあたらしい啓発方法」を目指したサテライト・シンポジウムで、入場は無料、一般にも公開される。

音楽の分野からは、シンガー&ラッパーとして幅広く活躍するBOO、「神にも届く」といわれる魅惑のボイスAWAとサンノヘシゲカズが出演。また、早稲田大学客員講師で、特定非営利活動法人ぶれいす東京の研究部長でもある兵藤智佳氏の研究報告も行われる。さらにHIVコミュニティのさまざまな人たちがHIV陽性者の手記を読み上げる手記リーディングも披露される。

今回の学術集会の運営委員で「Living Together Concert」のプロデュースを担当した生島嗣氏によると、HIV/エイズの啓発には多様な手法があり、論理的に知識を伝える方法もちろん重要だが、それと同時に感動や共感に根ざした体験が行動変容の大きな力になることもあるという。

射程の大きな啓発の手法を知識だけにとどまらず、コンサートをまるごと体験し、それぞれの現場に持ち帰っていただくため、どうかお時間の許す限りご参加いただき、土曜の夜を思いきり楽しんでください。



生島嗣さん

て生活していることを確認し、ここにHIV/エイズの時代をともに生きる「Living Together」の意志を宣言します》

### ●2日目の受付数、合計1172名へ！

新規参加登録者が236名増えて、合計で上記の参加者となった。

また3日目・13時現在の新規登録者は93名で、3日間の合計参加登録者は1300名に迫る予想である。

### ●エイズ学会速報編集部

編集長：宮田一雄

スタッフ：永易至文、吉田智子

写真：菊池修

## 耳寄り情報 その2

# Living Together 宣言に あなたも署名を！

コミュニティ・アクション06のウェブサイトで、Living Together宣言の賛同者を募っています。

賛同署名をWeb上からすることができます。

詳しくは<http://www.c-action.org/declaration/>をご覧ください。

### Living Together 宣言

《わたしたちはこの世界にHIV/エイズがあることを知っています。それがさまざまな困難を与えるということ、しかしその困難は乗り越えられることも知っています。そしてHIV/エイズはどこか遠い国ではなく、日々の生活の中にあります。

わたしたちはすでに、HIVというウイルス、エイズという感染症の流行が広く世界に存在する社会に生きていること、HIV陽性者であるかどうかにかかわらず、同じ困難と同じ希望を共有し